

## 共通課題

### 「農村社会編成の論理と展開 ——転換期における家と村落——」について

宿題委員会 松田 苑子

過去三年間「土地と村落」を共通課題に議論してきたわけだが、土地利用秩序は農家と村落のどのようなあり方とむすびついているのか。たとえば現今の土地利用秩序の背後には農家の生活構造（労働力構成、世代間関係、土地にかんする意識……等）と村落の社会関係（兼業化によって生じた新しい経済階層と従来の身分秩序の葛藤、村づくりや生産組織運営のメカニズム……等）があるはずであ

るが、これらを掘り下げる議論は充分には行われてこなかったように思われる。そこで、今回はこの点を課題にしようということである。

今年には農地改革実施四〇年にあたる。また、食管法をめぐる問題をはじめ、農業をとりまく状況は大きく変わろうとしている。一つの転換点にさしかかっていると考えられるのだが、ここで「家」と村落について議論することは「戦後自作農体制」の下での「自作農」を把握しなおす作業と重なるであろう。その際、村落社会にはたらく二つの力を視野にいれる必要がある。一つは行政による管理と方向づけであり、もう一つは農業と生活をみずからつくろうという村落社会に内在する力である。この二つの方向を視野にいれる概念として農村社会編成という概念を設定し、議論にとりくもうということから、本年度の共通課題が設定された。